

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**

**大学院学生研究**

**2016年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院			法学研究科	政治学専攻
<b>研究代表者</b> (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	法学研究科政治学専攻 博士前期課程2年		安藤有史 印		
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名		
	法学部・教授		小川有美 印		
<b>自然・人文・社会の別</b>	社会		<b>個人・共同の別</b>	個人	
<b>研究課題</b>	現代イングランド暴動史と治安政策・社会統合論理-反社会的なものの概念の変遷				
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	立教大学法学研究科政治学専攻 博士前期課程2年		安藤有史		
<b>研究期間</b>	2016年度				
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 199,761円 / (採択金額) 200,000円				

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

現代イギリス都市暴動の内実と、それに対応した政府・警察・自治体の治安・コミュニティ政策、調査報告書を資料に研究し、イギリス政治研究の政治社会学的な側面を考究する。具体的には1981年ブリクストン暴動から2011年トッテナム暴動までの暴動史を辿る。研究の目的は、何が反秩序的な騒擾であり、何が政治的な抗議行動か、そのように見做されるのか、その違いは歴史的にどのように変化してきたかを明らかにすることである。本研究が扱う30年の間に、イギリスにおける暴動に対する言説は、脱政治化した。こうした変化は暴動それ自体の客観的性質の変遷によるものか、それとも暴動を受け止める社会の側の変化に帰すべきか、論じた。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 暴動 } { イギリス政治 } { 文化犯罪学 }

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

## ・問題の所在と研究の目的

本研究は、戦後イングランド暴動(北アイルランド紛争と、治安政策の面で法制が異なるスコットランドについて検討しないため、必要に応じてイングランドという限定を使用する)を事例に、現代暴動研究の社会科学的理由付けの歴史の変遷を辿ることで、社会的な暴動と反社会的な暴動の分類メカニズムを明らかにしようとするものである。

2011年8月にロンドンのトッテナムで勃発し、イングランド各地で起きた暴動(以下2011年暴動)は、1981年のブリクストン暴動以来最大規模の社会秩序崩壊であるとされながら、その発生原因として失業や貧困、人種差別などの社会問題を強調する議論は勢いを持たなかった。もちろん、多くの暴動に対するように、アカデミズムや高級紙に定型的に見られる反応(暴動原因を社会不満に帰する言説)がなかったわけではない。しかし、2011年暴動については、道徳的退廃、野蛮な下層階級、消費主義的略奪を強調する言説が勢力を誇った。さらに特徴的だったのは、暴動に抗議行動としての意義を見出そうとする社会学者や暴動研究者の一部が、転倒した形で消費主義的略奪論を援用し、暴動が享乐的な商品略奪に特徴づけられることを積極的に認めた点である。こうした2011年暴動に対する言説の脱政治化は、イギリスにおける過去の暴動、例えば1980年代に起きたブリクストン暴動やブリストル暴動などと比較すると奇妙である。戦後イングランドにおける暴動の殆どは、カリブ系・南アジア系移民の社会統合の失敗、多文化主義の問題、警察による人種差別的取締りの問題と関連付けられ、分析されてきたからである。なぜ2011年暴動は政治的問題とされなかったのだろうか。いや、問うべきは逆かもしれない。そもそも暴動という暴力と略奪の集合行為を政治的または社会的な問題として捉える仕方が、ある時期までなぜ一定の正当性を保持できたのか、と問う方が自然かもしれないからだ。いずれにしても、デモや社会運動とは違って暴動が略奪を含む行動であり且つ、当事者たちが政治的主張を明示しないことが多いという前提から、ある暴動が「なぜ政治的問題だとされないのか」と「なぜ政治的問題にされるのか」のどちらか一方に偏ることなく研究を進める必要がある。こうした予断を取り払った上で、本研究は、公共秩序の崩壊(public disorder)を巡る言説において、何が反秩序的な騒擾であり、何が政治的な抗議行動か、そのように見做されるのか、その違いは歴史的にどのように変化してきたか、その変化は暴動それ自体の客観的性質の変化によるものか、それとも社会の側の変化に帰すべきか、といったことを明らかにしていく。

## ・理論的前提

そのための理論的枠組みとして、本研究が採用したのが、Benyon, Johnによる暴動解釈の整理である。Benyonによれば暴動研究には3つの解釈伝統がある。第一に保守主義的解釈。これは暴動を社会に存在する不公正や剥奪の問題ではなく、法と秩序の問題であり、非合理的な群衆行動として、人間の墮落や非道徳の問題と結びつける。保守主義的解釈は、既存の社会制度が適切なものであると評価しており、それに対する集合的暴力には正当性がないと考える。この解釈は、ル・ボンに代表される古典的な社会心理学に起源を持ち、広く一般に警察、政治家、メディアの広い部分で、現在でも容易に採用されることが多い。第二に自由主義的解釈。これは社会科学系のアカデミズムや一部の高級紙、教会、労働党などによって支持されてきた立場で、暴動の背景にある社会問題から暴動の発生を理由付け、暴動が政治的不満の表明であるとする。暴動の背景には、政治資源の不公正な分配、特定地域や人種に集中する失業や貧困、警察の恣意的な取締りといった問題があり、制度的な政治参加の回路から排除されている者たちにとっての意見表明の手段として暴動が起きる。有名なBachrach, PeterとBaratz, Mortonが「暴動は貧者にとっての投票箱」と述べてのはこの解釈伝統に位置付けられる。ただし、自由主義的解釈にとっての問題は、あくまで社会制度の不十分性にあるのであって、既存社会が本質的に不正だとは考えない。したがって、暴動は社会改良によって人々の不満を取り除きさえすれば、沈静化できると考える。この点が、第三の急進主義的解釈と異なる点である。急進主義的解釈は暴動を最も積極的に評価する。暴動が起きるのは、既存社会そのものが本質的に不正であるからである。社会とは元来何らかの利益の支持に偏った存在であるため、暴動は最も排除された者たちの政治運動という意味で、常に主要な政治運動の形態であり、革命との連続性で捉えられる。

さて、以上を整理すると、暴動の政治性を認めるか否かという線では、保守主義的解釈とその他の二解釈が対峙することになる。しかし、自由主義と急進主義の間にも看過できない差が存在する。自由主義的解釈が改革と再分配によって暴動の発生条件を改良可能であると考えているのに対して、急進主義はより原理的な社会の再構築を求めるからだ。このうち、20世紀の社会科学において支配的な位置を占めたのは自由主義的解釈であった。これは暴動に関する先行研究に占める自由主義的解釈の量の多さから直感的にも分かることだが、最大の根拠は、1981年ブリクストン暴動に対して英国内務省の依頼により作成された公式報告書スカーマン報告(Scarman Report)が、自由主義的解釈の論理構成を完全に採用していたことにある。

## ・1980年代暴動の先行研究

暴動が起きれば背景には貧困や差別といった社会問題があるはずだ。この考え方自体は、現在も一見あたりまえのように流通している。しかし、もともと自由主義的解釈には重大な問題があった。それは、社会問題という背景要因と、

## 研究成果の概要 つづき

暴動という事件を因果的に結びつけることが実は出来ていないのではないかと、という問題である。言い換えれば、同じ程度の貧困や失業がある地域全てで暴動が起きるわけではなく、場合によっては貧困がより深刻な地域は平穏で、より深刻ではない地域で暴動が起きたりもするのが現実である。これについては相対的剥奪論で補填されることがあるが、本質的な問題は残り続ける。同じ程度の相対的剥奪状況の地域全てで暴動が起きるわけではないからだ。こうした欠落を(ある程度)乗り越え、1981年のブリクストン暴動に対して、以後大きな影響力を持った暴動の説明を提示したのが、スカーマン報告であった。また、同様の構造を理論的に支援したのが Waddington, David による点火理論 (flash point theory) である(日本語による紹介として畠山弘文(1992)、(1993)、(1994)を参照)。先述の Benyon も *Scarman and After* という著作で、点火理論を支持している。

スカーマン報告および点火理論は、81年のブリクストン暴動とその後散発した同構造の暴動を次のように説明する。暴動が起きた地域にはカリブ系移民の高失業率や居住環境の荒廃、レクリエーションの不足、警察による黒人に対する恣意的な停止操作 (stop and search) といった構造的な不満が堆積していた(正確には、点火理論は6段階の構造要因があり、それぞれに説明が必要であるが、紙幅の都合上省略する。詳しくは、洋式3の修士論文参照)。そこへ、例えば警察の薬物捜査の最中に揉め事となり、カリブ系住民が暴行を受けるなどといった突発的な事件(点火)が加わることで、暴動という結果を引き起こすのである。点火理論とスカーマン報告は、こうした「構造要因+きっかけ要因」(比喩的には火花と火口箱 spark and tinder box)の接合によって、自由主義的解釈の弱点(背景の不正と暴動の発生が因果的に結びつかない)を補ったのである。この理論的展開によって自由主義的解釈は補強され、暴動解釈におけるヘゲモニーを確立した。

### ・2011年暴動に対する研究成果

しかし、この自由主義的解釈が機能不全に陥ったのが、2011年暴動であった。2011年暴動に関して自由主義的説明が困難に陥っているのは、単なる印象や暴動に否定的な見解によるものではない。2011年暴動については、様々な報告書が提出されているため、まずはそれらを読み込むことから研究を始めた。結果、これらの報告書において、最大公約数的にいえることは、社会問題(貧困、失業、警察問題、人種的偏りのあるインナー・シティ問題)と暴動の実態を結びつけることは難しいというものであった。注意しなければならないのは、暴動発生地域や参加者に貧困等の社会的排除が見られないわけではないことである(Community and Victims Panel (2012))。そうではなく、暴動の形態を見る限り、貧困や剥奪で暴動を説明することは難しいということである。暴動の逮捕者に関する英国法務省の統計によれば、エスニック・マイノリティではなく、白人若年層が最も多く参加していたことがわかる。また、暴動の襲撃対象は、電子機器店やスポーツウェアといった享乐的な商業施設が目立ち、暴動の実践からは暴動が略奪とお祭り騒ぎの機会として利用されたことがうかがえた(Briggs, Daniel, et al (2012))。こうした特性から、2011年暴動は、そのきっかけが警察による黒人青年の射殺に発しているにもかかわらず、暴動を論じる社会学者たちの方法は、自由主義的解釈の社会科学的方法ではなく、消費社会批判(Harvey, David や Bauman, Zygmunt, Moxon, David らによって主張された)という形で展開されざるをえなかった(ちなみに、2011年暴動についても前述の D・Waddington や Akram, Sadiya らの研究者は、自由主義的解釈の立場を堅持している)。それは、80年代の諸暴動のように、社会問題という構造要因から暴動の発生という事件を説明しようとする、社会科学的方法「説明」ではなく、社会批判(主に消費社会批判)という認識から暴動の発生という事件を「理解」しようとする姿勢であった。消費社会批判として暴動を捉えることは、暴動が略奪的であることを受け入れ、しかしその略奪性は社会全体が強迫的に消費することを要請しているという病理性の鏡像であるとする社会批判の方法だ。この点で、2011年暴動については、社会全般そのものを批判する急進主義的解釈が台頭しているとも言える。こうした「説明」(暴動について因果を提示しようとする)から「理解」(暴徒たち自身の主体的な世界認識から暴動の動機を提示しようとする)への移行、自由主義的解釈から急進主義的解釈への移行の背景には、暴徒たちを階級や人種といった伝統的なカテゴリー化では説明できなくなり、アンダークラス(片親家庭、福祉への依存と労働意欲の欠如、軽犯罪などを特徴としつつも、伝統的な階級やエスニシティでは括れない集団)という道徳的非難の対象であり且つ、社会全体のアウトサイダーとして最も批判的な存在が暴動の担い手になっているという変化がある。

### ・暴動研究に対する理論的貢献

ただし、このような「説明」から「理解」への変化が起きたのは、アンダークラスの登場という事実的な変化の単純な反映ではない。研究の最終部分では、犯罪学における刑罰福祉主義(生活環境が改善されれば犯罪は減少するという考え)の凋落と文化犯罪学(cultural criminology)の台頭を、暴動言説の変化に結び付けられることを提起した。この部分について紹介する紙幅は残されていないが、詳細は様式3の修士論文にまとめてある。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**④ その他**

2016年度 立教大学法学研究科修士論文「暴動解釈の政治学—現代イングランド暴動史(1981-2011)と暴動研究の文化犯罪学的転回」提出。